



エントランス内菱格子から漏れる自然光



展示ロビーのPCa屋根と土佐漆喰の壁



高知城の堀越しに望む風景



高知県立高知城歴史博物館

選評

山と海に囲まれて独自の文化を育み、数多の歴史上の人物を輩出した高知。その群像の一人、土佐藩主山内家の家伝の資料の高知県への移管を契機に、古美術・古文書の収蔵展示に止まらない今日的課題が議論され、挑戦的企画に未来を託してこの博物館は誕生した。

高知城を頂点とする土佐文化の歴史建築群への畏敬の念の在り方に始まり、浦戸湾に近い海拔二層のこの場所の数々の天災の記憶や、夏の日差し、豪雨など厳しい気候風土への対応に至るまで、ことごとくの課題のキーワードは「継承

性と持続性」という事になる。

随所に見られる土佐由来の菱模様の中でも、正面のカーテンウォールは、迫り上がる深い奥行き、菱形鋼製フレームが一際巨大な波紋を思わせる。背後に控えるPCaコンクリート洗い出しの板塀のような素材感の舟形バルコニーと共に、土佐の荒波に浮かぶ宝船のカラージュとして、抽象・具象入り混じるパビリオンのような景観によって、起死回生の新風を城下町に創り出す事が第一の挑戦である。

一階柱頭に中間層免震を採用し、二階以上に収蔵展示・電気・動力源を配して津波・水害・地震に備える一方で、外部を貫く免震EX Pジョイントカバリの陰影が多種多彩な意匠の積層を際立たせている。三階展示室は、リブ付きPCaコンクリート床版を場所打ちコンクリートで寄棟屋根に一体化し、鋼製屋根を重ねて二重防水としたものを軒先の二段リブで飛燕垂木に表現するなど、内部を構築する強い思いをその外観の造形に具現化する事が第二の挑戦である。

BCS賞は、建築の事業企画・計画・設計・施工、環境とともに、供用開始後1年以上にわたる建築物の運用・維持管理等を含めた総合評価に基づいて選考し、建築主・設計者・施工者の三者を表彰する建築賞です。この賞は、1960年にはじまり2018年で59回を数えます。

< 2018年 第59回 BCS賞受賞作品 > 太田市美術館・図書館 高知県立高知城歴史博物館 コープ共済プラザ 新豊洲 Brillia ランニングスタジアム すみだ北斎美術館 洗足学園音楽大学 Silvermountain & Redcliff (e-cube) 空の森クリニック 高崎アリーナ 多治見市火葬場 華立やすらぎの社 立川市立第一小学校・柴崎学習館・柴崎図書館・柴崎学童保育所 デンソーグローバル研修所・保養所「AQUAWINGS」日本無線先端技術センター パナソニック スタジアム 吹田 羽田クロノゲート 益子町地域振興拠点施設「道の駅まじこ」 [特別賞]名駅一丁目1番計画 (JRゲートタワー、JPタワー名古屋)



建築主

高知の歴史文化を全国へ発信

高知城歴史博物館は、土佐藩主山内家伝来の資料を核とした近世から近代に至る歴史文化を全国に発信する本格的な博物館として、2017年3月に開館し、これまでに30万人を超える皆様にお越しいただいております。

当館は、高知城や追手門の歴史的建築物と中心市街地を結ぶ重要な位置にあり、歴史と今を結ぶ建物として、県民から長く愛される新たな景観を創り出すことを目指しました。

そのため、高知城と現代の街並みを調和させる落ち着いた外観にするとともに、現代の堅牢な建築材料と自然石といった伝統的な建築材料との融和を図った建物としています。今後も、多くの皆様が歴史に親しむことができる施設として県内外にその魅力を発信することで、県の観光振興・地域振興に貢献するとともに、全国から注目される学術拠点として充実発展するよう努めて参ります。



高知県知事
尾崎正直
Masanao Ozaki

設計者

サステナブルかつヘリテージな建築



株式会社日本設計
建築設計部
チーフアーキテクト
松尾和生
Kazuo Matsuo

城の前に建つ博物館。膨大な歴史資料を守り、歴史的景観に相応しく、高知らしい博物館が誕生しました。山、海、船、波、鯨、鎧、城など土佐を想うキーワードからなる独特な建築デザインは、土佐伝来の匠の技である土佐漆喰、土佐和紙、土佐打刃物、大工、板金、瓦、石工などと現代技術の融合により創られています。これは、これからの高知県の文化施設の中に息づくべきDNAを示唆するものでもあります。先祖代々から受け継がれる歴

史、建築、文化に対し畏敬の念を持ちながら、城がもつ古来の建築技術に迎合するでもなく、現代的建築手法として意図的に抽象化したものでもなく、この地にしかない博物館が実現したのです。津波や水害対策を考慮した日本初の中間層免震構造の博物館は、土佐の厳しい自然環境や自然災害から大切な資料を守り続け、永続性かつ歴史的継承性を持つ建築として、また、現代から未来へつなぐ宝船として高知城の前に建っています。

施工者

建築を造る面白さ

当初、完成予想パースを目にした時、これは簡単にはいかないという覚悟のようなものから現場が始まりました。大菱型の鉄板フレーム、舟型のPC、大唐破風の屋根など、大胆な形状が城のように幾層にも重なる圧倒的外観に手ごわさを覚え、RC～中間免震～SRC～S～PCと幾種の構造も更に施工的難易度の高さを感じました。私は施工者を代表してここに寄稿させていただきますが、一緒に取り組

んだ専門工事業者、職人たちの技術・匠の技の結集がこの建築の実現につながったことをあえて伝えたいと思います。設計者の松尾氏が描いた線の一本一本をそのとおりの形にするため、それぞれが持てる技術をフルに発揮し、挑戦した結果です。松尾氏からプロポーザル当初のイメージ通りに竣工した建築と聞いていますが、私たち施工者も共にそこを目指したからこそ、今の姿があると思っています。



清水建設株式会社
四国支店 建築部 工事長
重田 忍
Shinobu Shigeta



土佐和紙の菱格天井を持つ和室

取蔵庫を二重構造にして四周から空気層で絶縁し、調湿・断熱・省エネ性能など過酷な環境に耐える万全の取蔵空間としている。その外周の隙間スペースを展望ロビーや茶室に作りこみ、土佐職人の和紙・漆喰・檜などで華麗に仕上げ、博物館のロビーにありがちな無機質の閉鎖性とは対照的に、その目眩めく豊潤さを歴史文化への探求心に誘う事が第三の挑戦である。魅力の発信と内面の充実、という挑戦において、外部と内部、全体と部分の往還は、この作品の難易度を象徴的に示すものであり、これを支える設計者の発想の熟度と施工者の工法の精度は見事である。加えて、余裕のない施設構成ながら、よさこい祭りや海外の観

光客の休息所をピロティに設け、そこから高知城を正面に仰ぎ見る光景を街起こしの起点にするという、博物館の枠を超えて都市に開く発想には、一種の危機感をバネにした建築主、設計者、施工者共通の熱い思いが見て取れる。幾多の困難はこの三者の三位一体の取り組みによって克服され、「安全安心の博物館」との評価は他施設からの展示物の融通など施設経営にも成果を上げるに至っている。近未来へ飛翔せんとする宝船は、文化を次世代に繋ぐ取蔵展示と観光振興の新発想の小宇宙でもある。新たな都市伝説の始まりに、建築もまた文化の一つである事を改めて気付かされる作品である。

【選考委員】
竹内徹・青木茂・尾崎勝



上／市民で楽しむお茶会
下／茶庭の腰掛待合とアプローチ

計画概要

建築主：高知県

設計者：(株)日本設計
(株)若竹まちづくり研究所

施工者：清水建設(株)
(株)轟組
入交建設(株)

所在地：高知県高知市追手筋 2-7-5
竣工日：2016年4月15日

敷地面積：3,983㎡
建築面積：2,548㎡
延床面積：6,220㎡

階数：地上3階
構造：鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄筋コンクリート造、プレキャスト・プレストレストコンクリート造、鉄骨造(免震構造)